

産業教育常任委員会先進地視察研修報告書

- 期 日 平成28年8月2日（火）、3日（水）
- 視 察 先 静岡県沼津市、伊豆市
- 参 加 者 委員8名、随員1名 合計9名
- 視察概要

【沼津市】

- 人 口 201,705人（H27.10.1現在）
- 面 積 186.96km²
- 調査事項 「特色ある学校教育（がんばる学校応援事業等）について」

1. 概要

沼津市の特色ある学校教育

①「夢ある人」づくり塾

市長・教育長を含め6人で構成。市を代表する知識人・経済人から沼津の教育について意見をきくための有識者会議を行っている。

②「言語科」の設置

平成18年、国の構造改革特別区域の特例措置により、新設。

「英語の時間」「読解の時間」など小学1年生から中学3年生まで全小中学校で実施

③隣接校選択制度

学校が近くにあるのに通学できないといった、通学距離の矛盾を解消するために導入された。5%の児童生徒が隣接校に通学している。

この制度により、学校が選ばれる側になったことから、魅力ある学校づくりの推進やより良い学校運営に取り組むといった効果も出ている。

④がんばる学校応援事業

育てたい子ども像や子どもたちに付けたい力を明確にしたうえで、各学校が独自に事業を企画立案し、市教委が予算面で学校を応援する事業。

⑤中高一貫教育

⑥沼津大志学習プラン（キャリア教育）

⑦沼津市教職員研修センター

⑧学力保証プログラム事業

①から⑧の特色ある取り組みの中で、特に④がんばる学校応援事業について事例を挙

げて説明をいただいた。

2. 「がんばる学校応援事業」事例

■【「豊かな心、思いやりの心」育成事業】開北小学校

地域の方を招いての勤労生産学習や、物づくり学習、体験談を聞く会などを通して、生活と学習の結びつきに気づき、子供たちが将来を考えるきっかけとなるようにしていく。また、地域の方々との関わりによって、地域で学ぶ喜びと地域を愛する思いやりの心を育てていく。

■【地域の人材活用キャリア教育推進事業】大平小学校

地域の人材や様々な分野で活躍している方と交流を行い、その方の生き方や考え方などを知り、家庭と連携しながら、自分の将来について考え、自分の夢に向かって努力する子、仲間と協力する子を育てていく。本年度は、宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所 曾根理嗣氏（沼津市出身）を講師として招く。

■【戸田が好き！ひとが好き！地域で学ぶ体験活動推進事業】戸田小学校

磯海苔かき体験、森林学習、戸田塩づくり体験、タチバナ収穫体験、幼小海の交流会、御浜清掃活動、松の植樹体験等、戸田ならではの自然や人材・団体等を活用し、直接体験による学習を行うことで、郷土のよさを学び、郷土を愛する気持ちを育てていく。

■【夢と大志を抱く人 育成事業】第五中学校

地域の人材を積極的に活用した、職業について話を聞く講座、現役の高校生から話を聞く講座、高校の先生から話を聞く講座、職業体験、社会の一線で活躍する人の講演会等を計画し、中学3年間を通して、自分の生き方の考えを深めていく。

■【地域人材活用キャリア教育推進事業】長井崎中学校

地域の産業である柑橘業や漁業に従事している方を講師に招き、仕事に就いた理由や現状、将来の展望などの話をきく。また、2年生で行う職場体験学習もできるだけ地元の仕事を体験できるようにして、郷土の仕事を理解し、愛着を持てるようにしていく。

☆☆ 各委員の所感等 ☆☆

- ・『がんばる学校応援事業』の特徴としては、校長が主体的に企画・立案をしていることが挙げられる。1校当たりの予算額は20万円程度と予算の金額は大きくないが、工夫して特色ある教育に熱心に取り組んでいることが伝わってきた。市内全校が

様々な活動にチャレンジしていることは、素晴らしいことだと感じた。

- ・ 同市では、小中一貫校の運営をしているが、質疑を通して、小中一貫教育は利点が多いというイメージを受けた。最上級となる中学生は、いわゆる低学年(小学生)の面倒を良くみて、低学年から見られているという意識が強くなり、悪いことをしなくなる傾向とのこと。
- ・ 『がんばる学校応援事業』も、『小中一貫校』についても、栃木市としてもこれらを参考に取り組むべき事業ではないかと感じました。
- ・ なかなか普段の生活で体験できないような、いろいろな仕事の体験や、話を聞くチャンスがあるのは、子供たちの将来に大きな影響があると思う。
- ・ 年齢に関係なくいろいろな方と接することにより、地元で学ぶ喜びや、地元を愛する心育つのだと思う。
- ・ 大変幅の広い事業を小中学校で取り組んでいることに驚いた。学校側の自由な考えに基づいて事業を立ち上げ、それに対して市から助成金が出るということで、学校側の独自性が保たれていて非常に良い。沼津市が行っている事業の良い部分を、本市のアシストネットに取り入れていきたい。
- ・ 一貫校の一番良いところは、小中9年間一緒の上級生が下級生の面倒を見るところ。これによって不登校やいじめが無いということであった。本市においても統廃合の検討が必要な学校が見受けられるが、検討の際には地域性を考慮しながら、小中一貫校を取り入れるべきではないかと感じた。
- ・ 人口の減少が避けられない中、新たな教育体制の構築は必須である。人と人との交流の中で人は成長するのだから、よき交流の場を作ることを実行していかなければならない。
- ・ 本市においては、合併後6年が経過したが、この間、少子高齢化が進展し、児童生徒の数は減少が進んでいる。ハード面で教育環境は整備されつつあるが、学校適正配置計画等が議会や市民に説明され、協議されているところであり、沼津市で展開されている特色ある学校教育は、大変参考になった。本市においても、この計画を参考にしながら今後の小中学校教育に役立てたい。
- ・ 校長の裁量権を拡大して校長のマネジメントを支援し、「夢ある人づくり」を進めるために教職員研修センターを設立したり、小中一貫校を開校したり、また、言語教育として、全国初の「言語科」を設置するなど、学校と生徒に活力を感じた。

【伊豆市】

○人 口 32,683人 (H27.10.1現在)

○面 積 363.97km²

○調査事項 「獣害対策と駆除個体の利用法について」

1. 獣害対策～防護～

電気柵や防護ネット・ワイヤーメッシュ柵等の設置により、シカ、イノシシの侵入を防ぐ。

市で資材費の1/2を補助金として交付。

2. 獣害対策～捕獲～

「伊豆市有害鳥獣捕獲隊」を組織し、安全対策を徹底しながら許可による捕獲を実施している。

3. 食用利用

捕獲したシカ・イノシシを食肉として利活用するために、食肉加工センター「イズシカ問屋」を設立

- ・ 捕獲したシカ・イノシシの買い取り→狩猟者の捕獲意欲の増進
- ・ 野生獣肉（ジビエ）→新たな特産品として地域振興

☆☆ 各委員の所感等 ☆☆

- ・ 農作物の被害や交通事故等の対策を軸に有害鳥獣捕獲隊を組織するなど力を入れたが、それに留まらず、捕獲した命を無駄にしない取り組みとして、食肉加工センターを設立し、まちおこしの一翼を担うまでに成長させた。加工肉は臭みもなく非常に食べやすく、栃木市でも同様の対策を施すことは非常に有意義ではないかと感じた。農作物被害の削減、新たな観光PRなどの連携も感じられ、参考になる事案であった。
- ・ 鹿肉と猪肉の加工場である「イズシカ問屋」の視察では、実際に肉の処理をしているところを見ることができた。鹿肉の切り落としであったが、思っていたよりも作業場は衛生的に管理されている印象を受けた。
- ・ いかに需要を広げることが今後の課題と感じた。栃木市に当てはめて考えた場合、イノシシの個体の方が多いと思うが、この事業を考えるにあたり、どれくらいの需要を見込めるのか予測が難しいと感じた。
- ・ 鳥獣被害、特に鹿の生息数が増えてしまったのは、メスの捕獲制限を長い期間し過ぎたことが原因であるが、これは国からの指示であり国の政策の失敗ではないかと感じた。
- ・ 栃木市においてもイノシシの被害がでているが、食用として扱うには、放射能の問題、狩

猟者の減少問題など難しい課題がある。

- 捕獲隊員の構成や取り組み、捕獲意欲を上げるための個体の買い取り、新たなブランド化等、素晴らしい取り組みを勉強できた。
- シカによる被害が想像以上であった。本市の場合、イノシシの被害のほうが大きいですが、シカ肉のほうが市場での消費量が多く、加工・販売もしやすいのではないかと思った。市で加工所まで作るとは驚きであった。
- 本市においても、将来的に捕獲されたイノシシが有効利用され、地元特産品として、食肉として、ジビエ料理として提供できるような形が作れたらと思った。